

挑発する「女ことば」——少女マンガ連載「ライフ」にみる少女の二面性と言語使用——

高橋 すみれ

すると、「自分」としての自由は、他人から見られる自分を好きなだけ何通りも持つという詐術の実践に多くかかわってくるだろう。
——高取英理『少女領域』¹

日本語表現で女性に用いられる言葉遣いとされている「女ことば」という概念は、「女性」に想定される話し方や、それに付随するイメージの形成を促してきたと言われる。²このような「女ことば」という概念やそれに伴って認められる「女性性」の構築において重要な役目を果たしてきたのが、小説やマンガなどのフィクション中の言語であると中村桃子は指摘している（「言語イデオロギーとしての「女ことば」」、123）。フィクションの中の「女ことば」は、このように女性を取り巻く社会的な力と密接に関わっていると見えよう。だが、その力は必ずしも一方向的なものではない。因京子は、フィクションにおけるこの種のジェンダー指標を伴う言語表現がジェンダーに関わる「ステロタイプの価値を上書き」しうると認める一方で、その「ステロタイプの虚偽性」およびその「ステロタイプを支える信念の無効性」を示すものとして戦略的に用いられる可能性に注目している。³

しかし、テキスト上の言語表現が特定のステレオタイプや価値観と結びつく可能性もまた、一つに限られるわけではない。フィクションの中の「女ことば」が支配的な価値観を再生産する、あるいはそれに抵抗するものとして機能するためには、読者の目線や関心が特定の方向に導かれるという前提がある。またその方向性は、フィクションを消費する読者のものの見方や価値観と密接な関係にある。本稿は、このようなテキストと受容者の関係性に留意しながら、虚構の世界で用いられる「女ことば」の社会的な意味を考察するものである。

本稿では連載少女マンガ「ライフ」（すえのぶけいこ作）をテキストとして取り上げ、その一登場人物である少女の言葉遣いの切り替えに注目する。「ライフ」は少女マンガ誌『別冊フレンド』上で2002年5月号から連載されている人気作

品であり、2006年度には講談社漫画賞を受賞、翌2007年夏にはフジテレビでドラマ化もされている。学校でのいじめを扱っていることで話題を呼んだ同連載では、高校生である少女たちの複雑な人間関係が描かれている。この物語の展開において、ある一人の少女キャラクターのせりふには、他の登場人物の少女たちの言葉遣いには見られないような「女ことば」表現が頻繁に見られるようになる。本稿では同連載でこの傾向が顕著に見られる時期（連載20話代から50話代）の展開に焦点を絞り、この少女間の葛藤を描いたひとつの物語が少女を読者と想定したジャンルである「少女マンガ」として読まれる上で、ある少女の「女ことば」使用がどのような意味を担っていたのかを考察する。

本稿で特に注目するのは、大人社会に入る前の少女の文化における「女ことば」の位置づけである。そもそも「女ことば」は、規範性と並んで階級の高さや上品さのイメージ、そして大人としてのふるまいと結びついて認識されるため、少女たちの間で仲間意識を培うのに適した言語ではないと中村は指摘している（『〈性〉と日本語』、82）。もしも少女たちの「仲間意識」が、これらのイメージを付与された「女ことば」とは相容れないものだとするならば、物語の中で一人の少女が「女ことば」を用いることの意味はどう解釈することができるだろうか。

1. 「女ことば/男ことば」と少女文化

いつの時代においても少女が「男ことば」を使う事例が頻繁に見られる傾向を、中村は異性愛規範に対する少女たちの姿勢と関わらせて説明している。少年期において、少年あるいは少女は異性と「つき合う」ことで同性コミュニティ内での高いステータスを獲得することになり、また同性同士で親密に語り合う機会を得る。しかし少年に比べ、少女の場合では異性と「つき合う」ことに伴って「性の対象」と見なされることについてのコミュニティ内の価値基準が介入し、このような関係性の秩序はいっそう複雑になる。少女は男子とつき合って同性コミュニティ内でステータスが得られたとしても、他の女子からは「ふしだらな子」というレッテルを貼られかねない。そのようなレッテルを回避しようとするならば、既に異性との交際を経験している少女たちから「子ども扱い」され、軽視される地位に甘んじねばならない。中村は、少女たちにとって「女ことば」を使うことは異性愛の「大人の女性」という立場を引き受け、このような「女性のセクシュアリティのジレンマに巻き込まれる」ことを意味す

ると指摘する。このジレンマとはすなわち、「性愛の対象になりたいという欲望」と、実際にそう「なってしまうと〈娼婦〉という性の対象物に墮落させられてしまう」ことの間で苦しむ状態である。それゆえ、このジレンマに囚われない「現実には不可能な新しい〈少女〉としての魅力」を模索するために、成長期の少女たちは「男ことば」を使うようになるのだと中村は説明している（『〈性〉と日本語』、157-160）。

「男ことば」を使う少女たちの意識を、少女を取り巻くジェンダー秩序と関わらせて説明している点では、この議論は興味深い。しかし、注意しなければならないのは、必ずしも「女ことば」を使うことが異性愛規範を内面化することの前提だとは言えないことだ。そもそも「女ことば」なるカテゴリー自体が女性の（あるべき）言葉遣いというステレオタイプに基づいているため、実際の社会における女性の多様な言語行動とは大きくずれるものだ。⁴そのため、性規範に対する少女の意識と言葉遣いは必ずしも明確な形で対応するわけではなく、その関係は複雑である。

続く二つの節では、ここで見た少女を取り巻くジェンダー秩序に留意し、少女マンガ「ライフ」の物語に描かれた人間関係と、その中の一登場人物である愛海（マナミ）という少女の言葉遣いとの関係を分析していく。そこで注目したいのは、女性特有のものと見なされている文末表現が彼女のせりふで多用されている点である。この種の文末表現は物語の中で愛海という登場人物のふるまいを特徴づけるものとして機能している。このことは、テキストが読まれること、また少女文化における仲間意識の構築や異性愛規範のしがらみとどのような関わりをもつと言えるだろうか。

2. 二分される言葉遣いとパーソナリティ

すえのぶけいこ「ライフ」は、掲載誌『別冊フレンド』が「国民的少女コミック」と称する人気連載である。⁵同作品は学校でいじめられる立場になったヒロインが、次々と困難を克服していくようすを描き、連載 70 話を超えた 2008 年 8 月現在、物語のクライマックスを迎えつつある。

ヒロインの椎葉歩がクラスメイトたちにいじめられるようになるのは、友人である安西愛海の恋人、佐古克己に彼女が横恋慕し、彼を奪おうとしているという噂が広まるためである。実際にはこの噂はクラスメイトの少女たちの誤解に基づくものだが、愛海が友人の歩に裏切られ、彼女に恋人を横取りされそう

になったかわいそうな存在であると彼女たちは信じ込む。そして愛海に対し同情を寄せる彼女たちは、諸悪の根源として歩を非難し、攻撃していく。

前節で見た少女間のジェンダー秩序と対比させてみると、この人物間の構図にはあるメカニズムが指摘できる。愛海は克己とつき合っており、既に「彼氏」を持つ少女たちのグループといつも行動している。3話では愛海とこの少女たちがセックスについての話題で盛り上がっているところに立ち合って歩が当惑する場面や、他のグループの地味そうな少女たちを愛海が「超暗い」と見下すような場面が見られる。これらの場面に見るように、クラス内の少女グループ間にはステータスの差が存在している。しかし、歩が克己を奪おうとしたという噂が広まることによって、こうしたクラス内にはグループを超えた少女たちの団結が生まれる。友達との結びつきを重視するこの少女たちにとって、友達の恋人を横取りするような少女は非難されて当然だと考えられるのだ。このクラス内のヒエラルキーを超えた少女間の団結によって、歩は過度に性的で危険な存在というレッテルを貼られて非難され、一方で愛海は同情を受け、庇護されることになる。

興味深いのは、自分と歩についてのこのような周囲の人物の認識を利用するようにして、その後の展開で愛海が巧みに歩を攻撃していくことである。連載が長期に及ぶ中、愛海は歩に対する怒りを募らせ、彼女を陥れる策を個人的に企てるようになる。彼女はかわいそうな存在として周囲の同情を買う一方、ヒロインや他のクラスメイトの考えが及ばないような策略を実行し、なおかつそれを隠蔽しようとする。例えば愛海は秘かに他校の男子学生と関係を持ち、彼に歩を襲わせる。しかし、学校では自分が歩に攻撃を受けているようにふるまい、周囲の学生たちが歩を非難するように仕組むようなこともする。

この展開に伴って、テキスト中の愛海の言語使用にはある変化が見られる。まず、連載初期から見られる愛海の話し方の特徴には自分を「マナ」と称し、文末の言葉を伸ばすこと、および文末にくる文字の母音にあたる音が小さく書かれて付されていることなどが挙げられる (ex. 「アユムはかわいーよオ? / マナね / 最初話しかけたとき思ったもん!!」、1.121)⁶。また、女性が使うものとされている文末詞の中でも「の」「なの」、また訴えや甘えを表現する「もの」を撥音化した「もん」などが多用されている。ヒロインや周囲の少女たちの幾分中性的な言葉遣い、また愛海の取り巻きの少女たちの「男ことば」混じりの現代的な言葉遣いに比べ、このような表現を多用する愛海の言葉遣いは時

に彼女の無邪気さや、庇護を必要とするような頼りなさを強調する。これらの言葉遣いを以降では便宜上、愛海の「女の子ことば」と呼ぼう。

自身を「マナ」と称する点は全体を通してほぼ一貫しているが、彼女が他校の男子学生と関係を持ち、彼に歩を襲うように依頼する 23-25 話を境に、愛海の発話には時に「のよ」（「なんでカラオケBOXでヤッちゃわなかったのよ」、23 話、6.156）「わよね」（「わかっているわよね」、25 話、7.72）などの女性文末詞が見られるようになる。他にも、以降の展開で愛海は「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「体言+ね」「体言+よ」などの文末詞を用いている。興味深いことに、物語中で他の少女キャラクターがこの種の文末詞を用いることはほとんどなく、継続してこれらを用いているのは担任教師の戸田など、少女たちより上の年代の女性に限られている。また、ここで取り上げたような文末詞は現代口語において衰退傾向にあり、これらの文末詞がドラマ上のせりふでは頻用されている一方で、実際に現代の女性たちの会話の中では稀にしか用いられないことを、水本光美は明らかにしている。⁷この種の女性文末詞が用いられるときの愛海の言葉遣いを、これ以降では便宜上「女ことば」と呼ぶ。

先の二段で挙げた「女の子ことば」と「女ことば」の使い分けは、またとりわけ愛海が時に応じて「女ことば」を多用することは、物語の中で愛海を二面性のある悪役として描いていくための演出の一部となっていたように見える。愛海による二つの言葉遣いの切り替えは、物語の中で彼女が意図的に行う次のようなパーソナリティ⁸の切り替えに伴うものである。愛海は周囲の人物に受け入れられるよう、「みんな」の前では庇護されるような純粋でか弱い少女のパーソナリティを維持しようとする。そのために彼女は人前では純粋に克己を愛する少女として、また自分から克己を奪おうとし、自分を傷つけようとする歩の攻撃の犠牲者としてふるまう。愛海がそのようなパーソナリティを人前で保っているときには、彼女の発話には「女の子ことば」が用いられている。しかしその陰で、彼女は自分が周囲に愛される存在であるために歩を攻撃する策略を練り、そのためには他校の男子学生と肉体関係を持ちもする。周囲の人物の前では隠蔽されるべきこのようなもう一つのパーソナリティを悠々と表現しうるときに、彼女は「女ことば」を用いているように見える。その使用状況は限定的であり、たとえば自分が敵意を向ける相手を挑発するとき、また人に聞かれていないとき、そしてその時点で自分が共謀しうる、あるいは支配下に置きうる相手に指図するとき、愛海は「女ことば」を用いている。

「陰謀」と題された 36 話をその例として挙げてみよう。ここでは、担任の教師と父親の前で、愛海が器用に言葉を切り替えるようすが見られる。以下の例は数ページに渡って愛海のふるまいが連続して描かれている部分で、彼女の言葉を抜き書きしたものである。

チョー

- (1) 「もしかして アレ？アレ見たんですか先生っ！！／も一超——びっくりしましたよお（中略）／ひどいイタズラする人がいるんですねー（以下略）」（10.24）
- (2) 「マナを疑うことなんて二度とできなくなるわよ（フキダシ外に「ハン」という手書きの文字とともに）」（10.29）
- (3) 「パパ……／ごめんなさい……／もう学校行きたくない……／マナいじめられてるの…」（10.37-39）

(1) は、偶然会った担任の教師、戸田に対して愛海が発する言葉である。この一つ前のエピソードでは、愛海が歩に攻撃されたと装って周囲の同情を買うようすが描かれている。愛海はその後保健室を荒らしているが、その後そ知らぬふりで (1) では「ひどいイタズラする人」によって荒らされた保健室を目撃して「超——びっくりし」と、口語混じりの敬語で無邪気に述べる。その後、愛海の元気なようすを見て安心しつつ、戸田が「本当に椎葉さんに殴られたのよね……？」（10.28）と一人つぶやくようす、続いて愛海の耳と、振り返って戸田の後ろ姿を見る愛海の横顔が描かれる。その次の頁では愛海の怒りをたたえた表情と、歪んだ口元の描写とともに (2) がある。戸田の言葉から、自分が歩に攻撃されているかわいそうな存在であるという認識が戸田の中で揺らぎつつあったのを察し、ここで愛海は次の手を打とうとする。その後の場面では公園の砂場に直進し、頭から砂を被り、制服を汚して帰ってきた愛海が、心配げな父の前で (3) のように言いながら泣き崩れている。その娘を抱きしめ、「かわいいマナちゃんをいじめる」者に対して怒りを燃やす父の血走った目と、父の胸元でほくそ笑む愛海の様子が大きく描かれたところで、36 話は終わる（10.41-42）。愛海はここで「いじめられてるの」と頼りなく父に泣きつき、自分を庇護してくれる父が、自分のために行動を起こすよう仕向けているのだ。この場面で登場している愛海の父は教育委員会にも発言権を持つ大手企業の社長であり、この次のエピソードでは学校に乗り込み、歩を処罰するよう訴えている。

このようにテキスト上で愛海は「女ことば」のもとで隠れた攻撃性をほのめかしては、人前で「女の子ことば」を用いてか弱い少女を演じている。愛海が間接的に歩を攻撃できるのは、自分が人前で無垢な犠牲者という立場を演じ続けることによって、歩に攻撃的な存在としてのレッテルを貼り、周囲の人物に歩を非難させることができるからである。そして、周囲の人物に歩を非難させるというこの愛海の策略を成り立たせているのは、歩が愛海の恋人を誘惑しようとした「ふしだらな」存在であるという少女コミュニティ内の共通認識である。これらのことに留意した上で、次節の議論に移ろう。

3. 多面性を持つキャラクターの受容

連載の中で愛海のこうした言葉遣いおよびパーソナリティの切り替えが顕著に見られるようになる頃の2006年1月号で、掲載誌『別冊フレンド』は愛海をモチーフにした特別付録を付けている。ヒロインとその親友が描かれた表紙の上部には、「衝撃のリアル? 「マナミ激変!!チェンジング・ポストカード!!!」 ついてます!」と太字で書かれ、表紙の隅には明るい笑顔の愛海の画像とともに、「歩もびっくりの4変化! この笑顔が…!? あなたもゼッタイ見たくなる!」と書かれている。実物のカードはホログラムになっており、角度によってこの笑顔の他、瞳を潤ませた泣き顔、怒りの表情、さらには幽霊のような輪郭のぼやけた冷徹な表情が出てくる。このような付録の企画からわかることが、少なくとも二つある。一つは、この時期には愛海が多面性を持ったキャラクターだという認識が読者に定着していると掲載誌は見込んでいるということだ。もう一つは、ヒロインへのいじめを主導する少女でありながら、この物語の中で彼女が単に人道的に咎められるべき人物として描かれるのにとどまらず、注目すべき重要な登場人物として存在感を得ているということだ。

愛海という登場人物が注目されるようになる理由の一つとして、彼女がヒロインにとって乗り越えるべき障壁を設定していく存在であることが推察される。宮台真司は「ライフ」が「予定調和的な結末への期待を含めて」「主人公の波瀾万丈を読者が代理体験する娯楽」として読まれているという見解を持っている(藤井・宮台、220)。読者は歩が誤解されて周囲の少女たちに問題視され、いじめを受けるようすを見守っている。読者がこのヒロインの側に立って物語を見る限り、愛海はヒロインの言葉を借りるならば「汚い手ばっか使」う(10.96)、「心の腐ったヤツ」(11.50)に見えるだろう。そして、ヒロインに感情移入す

る読者の視点から見ると、愛海は決して純粹でか弱い少女などではなく、複数の顔を使い分けて策略を展開する腹黒い女であろう。彼女は皆の前では恋人の克己を真摯に愛しているようにふるまい、歩に攻撃されているように見せかけながら、陰では他の男性と肉体関係を持ち、歩を陥れようとしている。愛海が「女ことば」を使うときのパーソナリティは、物語中で周囲の人物に気づかれていないものであるがために、読者には愛海というキャラクターの内面や隠された本性のように見えるのだ。そしてまさにこのように読者の物語世界の捉え方を操作するという点で、愛海の言葉遣いの切り替えは有効なレトリックとなりえていたと言えよう。⁹このことからみると、読者共同体としての少女たちにとって、誰が本当に非難されるべき存在であるのかをしるしづけるために、愛海が「女ことば」を用いているように見える。実際にこの後の物語のクライマックスにいたって、愛海が周囲の人物の信用を失い、彼女が窮地に追い込まれていく中で、彼女のせりふには次第に「女ことば」が見られなくなる。¹⁰このような展開からは、この「女ことば」に体现されるような要素が物語世界の中で排除されようとしていたと考えることもできるだろう。そして、その要素とは、周囲の人物が見ていないところで表現される愛海の逸脱したセクシュアリティや自己愛に満ちた狡猾さだとも言える。そうだとするならばこの排除の構造は、先の節で見てきた少女間のジェンダー秩序とも関連する。「女ことば」はテキスト上で愛海を過剰にジェンダー化し、彼女を「ふしだらな」、ゆえに非難されるべき存在と見なすよう読者共同体の目線を導いていたと考えられる。また、物語中で愛海の企みに気付いた副担任の教師、平岡が彼女を諭そうとするとき、彼女が孤独であることを指摘しようとしている（「あなたはひとりぼっちになる!!」、13.74）。このような表現のもとでは、愛海の間人関係やふるまいの不毛さが物語られているようでもある。

しかし、愛海および彼女の「女ことば」を使うパーソナリティは、本当に読者に憎まれるべきものとしてのみ受容されていたのだろうか。愛海が掲載誌（2006年10月号）やコミック単行本（13巻および17巻）の表紙を単独で飾っていることから、彼女自身が読者の注目や、人気をすらすら集めていたように見える。もし悪役としての彼女の描写が好感をもって受け容れられていたと考えるのであれば、彼女の「女ことば」やパーソナリティの使い分けに対しても、異なる意味を見出すことが可能となるのではないか。

この点で考察を深めるために、記号の解釈を「階級闘争の場」と見るヴァレ

ンティン・ヴォロジノフの議論を参照しよう。複数の階級が同じ言語を使う状況では、一つのイデオロギー的記号も本来であれば様々な価値基準のもとにさらされ、理解されるはずである。しかし、支配階級の価値基準に基づいた見方が流通することで、その記号は単一的にアクセントを置かれた形で解釈され、そのような解釈がしだいにスタンダードとされていく。そのため記号の「中で起こっているはずの社会的な価値判断のせめぎ合い」、あるいは潜在的な「複数アクセント性」が見えないものとされ、意味が統制される過程を、ヴォロジノフは支配的文化における権力と関わらせている (23)。

このことは、支配的な読みと解釈可能性との問題にも応用できる。読者にとって愛海、および「女ことば」を使う彼女のパーソナリティが非難され、憎まれるべきものに見えるとき、彼女が言葉遣いとともを使い分ける二つのパーソナリティのうち、「女ことば」を使う面が、彼女の墮落した内面として強調され、彼女の本質を説明するもののように認識されている。これは先に述べたように、物語の中で本当にいじめられているヒロインと利害を共有し、真に「ふしだら」で非難されるべき存在を排除するように読者の解釈を導き、統制するテキストの力と密接に関わっている。そしてこの面から見るならば、愛海の「女ことば」使用は彼女を異性愛のセクシュアリティ規範の中に取り込み、読者である少女たちの仲間意識から排除される対象にしていると言えるだろう。

だが、愛海が二つのパーソナリティを使い分けていることによって、彼女がテキストにおいてどのような少女たりえているのかに注目してみよう。第一節では、少女が「女ことば」に象徴される異性愛の「女」ジェンダーを引き受ける上で巻き込まれるという「女性のセクシュアリティのジレンマ」について言及した。そもそも、なぜこのジレンマが生じてしまうかという、その少女が「性的な」存在であるか否かが、仲間意識やコミュニティ内の価値基準のもとで見られ、批判あるいは軽視の対象となることに結びついてしまうからである。あるいは、周囲の価値基準によって貼られたレッテルのもとでその少女自身の存在が縛られ、人間関係に葛藤を生じてしまうからである。しかしながら、愛海がこの周囲の登場人物に見られるパーソナリティともう一つのパーソナリティを使い分けているとき、少なくとも物語の中では、このような葛藤から自由であるように見えるのだ。

彼女が「女ことば」を用い始めるのは、他校の男子学生と関係を持ち、彼に歩を攻撃させるという展開に入るときであった。愛海がこの男子学生と肉体関

係を持つ際に、彼女は自分がクラスで「悪者扱い」されつつあることを彼に訴えている（6.169）。これは、丁度その頃に、学校で歩を非難し攻撃する愛海たちを問題視するような人物が何人か出てきた展開を受けている。彼女はこの状況を変えようとするかのように、また周囲の人物に「悪者扱い」される、つまり悪い存在として見られることをどこまでも避けるかのようにその後策略を展開していく。そのため、見えないところで歩を攻撃し、人前では歩から攻撃されるようなかわいそうな自己像を確立していくのだ。

しかし、周囲の人物が見ていないところで「女ことば」を使っているとき、彼女はことさらに自分が物語の悪役であることを意識しているかのようなせりふを発している（「あんたの正義なんかこの手で塗りつぶしてやるわ／真っ黒にね……！」、11.52-53）。このことは、愛海が周囲の人物から見られるためのパーソナリティと、物語の中の悪役としての立場を分けていると考えれば、何ら矛盾するものではない。むしろ、愛海が「女ことば」を使うのは、物語の中では周囲の人物に気づかれていないような悪役としてのパーソナリティを、読者の目に見せつけるためだと言えるのではないだろうか。

この二つのパーソナリティの間の差異を際立たせ、時に周囲の人物に見られる存在から自由な空間を謳歌する自分を読者に見せつけるかのように、「女ことば」を用いる愛海のパーソナリティの表現はしだいにグロテスクな描写や、過剰な演出を帯びていく。前節で言葉遣いを切り替える愛海の発話例を挙げる際、愛海が歩からの攻撃を受けたように装った後、保健室を荒らしていることについて触れた。その場面では自分の策略を知ってしまった一人の友人を彼女が「女ことば」で脅しながら赤チン（マーキュロクロム）を保健室のベッドに打ちまけ、その上から鋏を突き刺すという猟奇的な行動が8ページに渡って鮮やかに描かれている（35話、9.160-167）。また同じく前節で挙げた、愛海が父親に自分が「いじめられている」ことを訴える場面の前では、「女ことば」で策略をほのめかした後、厳しい表情で砂場に向かって突進し、公園の砂場で恐れおののく子どもたちをにらみつけ威嚇する彼女のふるまいが6ページに渡って描かれている（36話、10.30-35）。

こうした愛海の「女ことば」を用いるときの、また周囲の人物に見られていないときの狡猾なパーソナリティを誇張する描写は、彼女の悪役としての立場を強調する一方で、それ自体が読者に愉しまれるものとなっていたようにも見える。本節のはじめに触れたように「激変」する愛海が付録のモチーフとなる

ようなことがあるのも、このような大袈裟な描き分け自体が「面白い」ものとして受容されると見込まれていたからであろう。

テレビジョンの「誇張表現」は、その意味の過剰さゆえに「支配的なイデオロギーと同時にそれに対する批判をもたらしうる」形で二重に分節され、そのいずれの視点にも読者を導きうるとジョン・フィスクは述べている(91)。この点から愛海の「女ことば」を用いるパーソナリティを見るならば、彼女の「女ことば」使用が担う意味も二重に解釈しうる。彼女のせりふに時に現代口語では衰退の傾向にある、また物語中で他の少女たちにも使われていない「女ことば」表現が多用されることは、少女たちの中でも彼女を過剰に「女」としてしるしづける指標となっている。一面から見るならば、このことは女性を取り巻く異性愛規範のもとで彼女を「性的な」存在として位置づけ、少女のコミュニティにおける彼女の異質性を強調するものとなっている。このことは愛海の存在をテキスト上の他の少女たちとは区別し、また読者の共感に基づく少女間の絆から排除されるべきものとする。したがって、この「女ことば」表現は読者に内面化された異性愛のセクシュアリティ規範に働きかけることで意味をなし、同時にそれを通して規範そのものを維持すると解釈できる。しかし、もう一面から見るならば、このような表現は周囲の少女から愛海の存在感を際立たせ、読者の目を惹きつけるものにもなっていたのではないか。¹¹「女ことば」を用いているとき、彼女はクラスの少女コミュニティから距離を置き、少女として見られる立場から離れてふるまう。このとき彼女は、少女たちを取り巻き、そのコミュニティの内外で少女を監視するような価値観に縛られずに行動している。この点に注目してみると、愛海の「女ことば」使用のもとで、現実のしがらみの中では見出すことが難しい「新しい〈少女〉」像が表現され、そしてそれを支持しうる少女たちの文化が実現していたとも言えるのではないだろうか。

悪役であることと、周囲の人物の捉える自分像とのずれを増幅させ、愛海はヒロインやその味方であると想定された読者を挑発する。そのとき、テキスト上で彼女は、「女ことば」を用いながら自身を性的で邪悪な存在としてしるしづけている。そしてまたその行為は、物語の中で周囲の少女たちに見られ、同時に読者たちに向けられる自己像を操作するものである。誌面でこのような二面性を発揮しながら活躍していく過程で、愛海は少女、あるいは女性に向けられた規範もまた、挑発していたと言えないだろうか。そのようすは特に物語中に見られる彼女と男性との関係に明確に指摘できる。前節で挙げた例では、愛海

は父に庇護されるような娘としてふるまい、父の権威を利用するかのようになやすく彼を操っていた。また41話では愛海は自分を守ると誓う克己に対して信頼を寄せるかのようにふるまった後、「女ことば」のもとで彼を「ほんとはつまらない男」だが「マナの思い通りになる駒」ではあると軽視し評価づけている(11.71)。彼女は父や恋人の前で、庇護されるべき少女としてふるまい、彼らに愛されようとする。そしてそのふるまいの一方で、彼女は「女ことば」のもと、実質的には自分が彼らに対して力を行使し、彼らを容易に操りうることをほのめかす。このようなとき、彼女は純粹でか弱い少女として役割演技をする裏で、彼らをだますようなさまを私たち読者に見せつける。彼女はこのようなふるまう中、自分が純粹でか弱い少女としてのみ存在することに、あるいは自身がそのように存在するものだという強固な幻想には、囚われていないのだ。

23話以降から50話代をピークに、「女ことば」を状況に応じて用いながら悪役として活躍していく愛海の存在感は、少女マンガの歴史に見られてきたヒロイン像と興味深い対照をなす。1970年代半ばから現在に至るまで少女マンガの主流となっている、男性に「一途な愛」を捧げるひたむきで「純粹」なヒロインの物語に、藤本由香里は「危険な罌」を指摘している(21-30)。愛を美化する幻想を植えつけられ、その幻想を追求するかぎり、女性は自己犠牲的な役割をすすんで引き受ける立場に甘んじねばならない。藤本はこの罌から逃れるための一つの方法は「わがままになること」、つまり「自分の欲求をはっきりと認識し、それを得るための手段とは区別する」女になることだとし、そのようなヒロイン像もまた少女マンガの中で模索されてきたと述べている(37)。支配的なイデオロギーから距離を置くこの新たなヒロイン像、そしてその戦略的な姿勢は、ここまで見てきた愛海の描かれ方に通じるものではないだろうか。「女ことば」を使う、狡猾な悪役としての愛海の描写は、女性を善悪に分けて敵対させるような世界観を構成することによって、ヒロインに対する読者の共感を呼び込んでいたと言える。しかしこの構図に基づく描写の展開は、同時にアンチヒロインとしての愛海の魅力を開花させ、読者に爽快感をもたらすものにもなっていたのではないだろうか。¹²そのような読者の楽しみを想定する場合、愛海の「女ことば」使用は必ずしも少女間の絆から排除されるべき異質性の指標にはならない。読者と愛海の間には絆を見出すとき、愛海の「女ことば」には貶められる悪女のステレオタイプに限定することのできない、新たな意味が付与されていたと言える。いかにして少女が自身の欲望を認め、狡賢く生きることを

楽しむことができるか。もしもそんなサヴァイヴァルが、一見勸善懲悪型の結末を予測させるいじめの物語を隠れ蓑として展開していたと考えてみよう。愛海の「女ことば」はセクシュアリティのダブル・バインドのもとで彼女と読者を拘束する枷のように見えながら、またそうした見せかけのもとで彼女たちがセクシュアリティのダブル・バインドを出し抜く「手段」にもなっていたようにも見える。

むすび

以上、本稿では「ライフ」という少女マンガ連載の中で、愛海という少女に用いられる「女ことば」の機能を考察してきた。現代口語では実用の衰退している種の「女ことば」をこの少女が用いることは、彼女が「性的」で邪悪な「女」として過剰にしるしづけられ、読者を含む少女たちのコミュニティから排除される上で機能していたように見える。この点から見れば、この虚構上の「女ことば」は異性愛のセクシュアリティ規範のもとで一人の少女を貶め、彼女を少女コミュニティの仲間意識から排除されるべき存在にしていたと言える。しかし、周囲に見られ、読者の前に提示される自身のイメージを巧みに操る愛海のふるまいに注目するとき、愛海の用いる「女ことば」にはもう一つの意味が見出せる。現代の若い女性の言葉遣い、および物語中の少女キャラクターたちの言葉遣いの双方とずれた愛海の言葉遣いは、規範を意識する少女たちのコミュニティや、その意識からくるジレンマから距離を置いた、彼女の超越的な部分を強調しているようにも見えるのだ。愛海が読者の関心を引きつける存在感を得るに伴い、彼女の用いる「女ことば」の解釈可能性は広がってくる。愛海の「女ことば」はこの長期化する連載マンガの中で、読み手を、少女に向けられた規範を、そして解釈を挑発しうるスパイスとなっていたのではないだろうか。

注

- 1 112 頁より引用。
- 2 中村桃子『ことばとジェンダー』、『〈性〉と日本語』
- 3 「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い」掲載のオンラインジャーナルには頁の記載なし。
- 4 高崎みどりは、談話データから得られた女性の多様な言語使用の形をもとに、「均質な言語使用をする単一集団として捉える「女ことば」という概念をあてはめること」自体に無理があるという見解を示す(46)。

- 5 『別冊フレンド』2007年12月号表紙より。なお、同表紙では「ライフ」のコミック単行本が発行累計(1巻から16巻まで)800万部を超えたと公表されている。
- 6 テキストから登場人物のせりふを引用する部分では、「ライフ」という同一作品のみを扱っているため、便宜上(該当する物語エピソードが収録されたコミックス単行本の巻・頁)という表記を用いる。また、せりふの引用において、連続するせりふが幾つかのフキダシに跨っている場合、フキダシ間の区切りを「/」で示している。
- 7 水本は、20代、30代、40代の女性たちの親しい者同士の会話データから、「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「体言+ね」「体言+よ」「のよ」「のね」「の(非疑問系)」の10種の「従来女性特有とされた文末詞」の使用状況を分析している。その結果、現代では30代以下の女性のサンプルでは「の」と「のね」以外がほぼ死語となっていると明らかにされている(「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」での調査から)。
- 8 ある人物が「どのような人物なのか」という統合的なイメージが言葉遣いなどを通して構築されるという主張の中で、中村はその統合的な人物イメージを「アイデンティティ」と呼んでいる(『〈性〉と日本語』、25-28)。しかし一人の少女の二面的な性格が主に二種類の言葉遣いによって表現されるという例で、同一人物が切り替えながら担う二つの人物イメージを「アイデンティティ」と呼ぶことは議論の混乱を招く。そのため、本稿ではそのような統合的な人物イメージを、他者との相互作用の産物として考えるヴィヴィアン・バーにならって「パーソナリティ」と呼ぶ。
- 9 この「ライフ」という物語テキストにおいて愛海を悪役として演出するレトリックの一部として「女ことば」が担っていた機能については、高橋すみれ「悪女の「役割」——少女マンガ「ライフ」にみる少女の「女ことば」(『Gender & Sexuality』、2009年3月発行予定)にて詳細に論じている。
- 10 本稿では「ライフ」1話から73話(『別冊フレンド』2008年7月号掲載)までの物語を扱い、その中でも主に23話から50話代に顕著に見られる表現傾向を取り上げている。クライマックスを迎えた74話以降のエピソードでも本稿で扱っているような「女ことば」表現が一部使用されているが、本稿でこの部分について十分考慮できていないこと、またそれゆえ「女ことば」が担う意味を検討する本稿の議論に幾分偏りが生じていることを認めなければならない。
- 11 この点では本稿での議論の他に、本来のフィスクの主張にならって次のような解釈も可能になる。愛海を悪役として描く演出が大げさになっていけばいくほど、その描写を読者は現実的でないものとして批判の対象にしたり笑い飛ばしたりすることもできる。このような捉え方と支配的イデオロギーとの関係も検討できるが、本稿では主に悪役として描写される過程で愛海が読者に人気を得ていた可能性に注目している。
- 12 アンチヒロインとしての愛海が存在を捉えようとする筆者の意図は、物語に見られる女性同士の対立や、少女のいじめ・攻撃行為を正当化することにあるのではない。ここで主に関心を向けているのは、「ヒロイン」対「悪役」という対立的

なキャラクターの類型に縛られず、少女読者が物語の中の少女像を受容しうる可能性である。

参考文献

- すえのぶけいこ. 『ライフ』 1-18. 講談社、2002-2008.
『別冊フレンド』 2002年5月号-2008年7月号、講談社、2002-2008.
- 高崎みどり. 「「女ことば」を創りかえる女性の多様な言語行動」『言語』 31.2(2002):40-47.
- 高取英理. 『少女領域』 国書刊行会、1999.
- 因京子. 「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い——女性ジェンダー標示形式を中心に」『日本語とジェンダー』 7(2007). 2008年6月4日採取
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no7/02_chinami.html>
- 中村桃子. 『ことばとジェンダー』 勁草書房、2001.
- . 「言語イデオロギーとしての「女ことば」——明治期「女学生ことば」の成立」『日本語とジェンダー』 日本語ジェンダー学会編、ひつじ書房、2006、121-138.
- . 『〈性〉と日本語』 NHK出版、2007.
- バー、ヴィヴィアン. 『社会構築主義への招待——言説分析とは何か』 田中一彦訳、川島書店、1997.
- 藤井誠二・宮台真司. 「学校を無痛化することで「いじめ自殺」は解決できるのだろうか」藤井誠二『学校は死に場所じゃない』 ブックマン社、2007、220-245.
- 藤本由香里. 『私の居場所はどこにあるの?——少女マンガが映す心のかたち』 学陽書房、1998.
- 水本光美. 「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」『日本語とジェンダー』 日本語ジェンダー学会編、ひつじ書房、2006、73-94.
- Fiske, John. *Television Culture: Popular Pleasures and Politics*. London: Routledge, 1987.
『テレビジョンカルチャー——ポピュラー文化の政治学』 伊藤守ほか訳、梓出版社、1996.
- Volosinov, Valentine N. *Marxism and the Philosophy of Language*. Trans. Ladislav Matejka and I.R. Titunik. New York: Seminar Press, 1973.